

内村鑑三 闘いの軌跡(二)

A Critical Biography of UCHIMURA Kanzo (Part 2)

関 口 安 義
SEKIGUCHI Yasuyoshi

第二章 札幌バンド

一 札幌農学校

内村鑑三が太田(新渡戸) 稲造・宮部金吾らと志望した札幌農学校は、前章でふれたように、校長は調所広丈、教頭には、アメリカマサチューセッツ農科大学学長W・S・クラーク(William Smith Clark)が一年間の約束で就任し、学校の基礎を築いて去った。クラークについては、次節で詳説する。鑑三は父宜之と相談の上、学費が無料で、様々な特典のある学校のことを父に語り、父の同意も得た。父は鑑三が東京大学で法律を学ぶことを願っていたが、鑑三の北の

国札幌で学びたいという熱心な願いと、家政のことを考えると、受け入れざるを得なかったのである。

札幌農学校に入学が決まった内村鑑三は、当時、宮部金吾・太田(新渡戸) 稲造と特に親しく、毎日のように会っていた。その様子を語る新渡戸稲造の回想があるので、以下に紹介する。

明治十年の同級生が七八名札幌農学校入学を決心するや、我輩は内村、宮部の両氏に一層の親しみを結んで、殆んど隔日毎に学校以外でも逢ふことがあつた。その頃内村氏は富坂に居り、宮地氏は御徒町に、我輩は愛宕下に居つたから電車の無き頃、又電話もなければ余程の親しみなければ中々往復を屢々することの難かつたにも関らず、中心点を定めてそこで定時間に出逢ふことにした。その待合する場所は当時東京に於ける唯一

の図書館であるお茶の水の聖堂であつた。然らざれば上野の大仏前であつた。顧みれば初心な潔白な少年時代であつた。当時はまだ宗教には思ひも寄せず、寧ろ反対の気味さへ抱いて居つたけれ共、学問には頗る真面目であつた。三人の間に約束を整へてお互に逢ふ時は必ず英語を用ふることを定めた。若し思ひ通りの言葉が発しない時は、一と度許しを受けて日本語の単語を用ふることとし、若し許しなしに日本語を用ふる時は五厘の罰金を出すことにした。故に何かの工夫をして罰金を取ることさへ考へた。

さて、ここで鑑三生涯のよき二人の友、太田(新渡戸)稲造と宮部金吾にも若干言及しておきたい。太田稲造は、一八六二(文久二年)九月一日、陸奥国岩手郡岩手(現、岩手県盛岡市)の生まれ。内村鑑三の一歳年下に当たる。彼は南部藩の下級武士の出であり、一時東京で洋服店を経営していた叔父の太田時敏の養子となり、共慣義塾を経、東京英語学校に学んでいた。東京英語学校では一級上の佐藤昌介(のち北大総長)と親しく、札幌農学校に進学が決まった頃からは、前述のように鑑三と宮部金吾との仲が急に深まるのであつた。太田(新渡戸)稲造は、後年一高校長や東大教授、そして国際連盟事務局次長などを歴任した。

宮部金吾は一八六〇(万延元)年四月二十七日、旧幕臣の家に生まれた。鑑三より一歳年長である。生家は江戸下谷和泉橋通御徒町で、本人の「自叙伝」によると、「上野広小路松坂屋南側に通ずる青石横町を和泉橋通に出た所から程近く」で、「文人、書家、画家等の住める者も少からず、閑静な住宅地であつた」とのことである。

横浜高嶋学校に学ぶも学校が火事のため廃校となり、東京英語学校に転じた。内村鑑三は当初一学年上のクラスにいたが、一年間の休学があつたため、同級となり、共に札幌農学校を志願したのであつた。宮部金吾は言うまでもなく後年植物学者として大成する。

彼ら三人を含めた札幌農学校合格者全員は、東京の芝区新橋五丁目の開拓使御用宿の植木屋に集められ、約一ヶ月共同生活をし、入学準備のための生活を送つた。宮部金吾は右の自叙伝に、札幌農学校同時入学の藤田九三郎の「日記」からの援用と断つて、「八月一日に開拓使より金拾円と服等(上着、ズボン、帽子、シャツ、ズボン下、靴、靴下)を受取り、一日には雨着、カラー、襟飾、ズボン吊り等を受取る」と書いている。上着やズボンや帽子はまだしも、シャツやズボン下や靴下までが、無料給付とは驚くほかない。その上に上野で開催中の第一回国勸業博覧会の見学もさせてもらつてゐる。彼らは、まさに官費丸抱えの学生であつたことになる。没落士族の子弟であつた彼らにとつて、札幌農学校はまさに夢の高等教育機関であつたことになる。

このころ内村鑑三・太田(新渡戸)稲造・宮部金吾の三人に、同じ東京英語学校出身の岩崎行親を加えた四人は、立行社という結社を造り共に努力することを誓ひ合つてゐる。岩崎は後年、鹿児島島の第七高等学校造士館(現、鹿児島大学)の校長となつた。ちなみに初期の札幌農学校からは、優れた教育者が輩出する。この岩崎行親をはじめ、甲府中学校校長の大島正健、神戸中学校(神戸一中)校長の鶴崎久米一などである。

一八七七(明治一〇)年八月二十七日、午後五時、品川から開拓使御用船玄武丸に乗つた内村鑑三をはじめとする一行は、その夜は

品川沖に停泊し、翌朝午前二時、北海道の函館に向かつて出航した。航海は二日に及んだ。途中、海が荒れて、一行中にも船酔いをするものもいたという。これも宮部の自叙伝によると、「私達の乗船した時は幸に船客が極めて少なく、一行は一等室若しくは二等室であつてがはれた。この引率者は幹事であり、予科で英語の教師を兼ねてゐた井川冽氏である」とある。函館には八月三十日に入港、さらに小樽港まで船で行き、そこからは陸路札幌に向かう。「馬」を利用してというが、「馬車」のことであろう。夜到着とすると、農学校の一角からは、讚美歌が聞こえてきたという。夕礼拝、もしくは祈禱会での讚美歌斉唱だったのかも知れない。

宿舎は十二畳の部屋に二人が寝起きするという、恵まれた環境であつた。部屋にはベッドに机、椅子、それにストープも置かれていた。これを一九一〇年代の第一高等学校の寮と比べると雲泥の差がある。内村鑑三の弟子、矢内原忠雄や後年の法哲学者恒藤恭らが一九一〇（明治四三）年九月に入寮した一高の南寮は、一室に十二名が押し込められての共同生活であつた。

ここでは当然プライバシーの保護などもなく、気を緩めると、当時ほとんどの生徒がつけていた日記さえ盗み読みされた。それに比べると札幌農学校の寮は、天国のようなものだ。十分なスペースとさまざまな施設にも恵まれ、各個人の生活は、尊重・保護されていた。そうでなければ、少し前まで蝦夷地とよばれた、寒くて雪の多い酷寒の地の学校に、優秀な人材を集めることは出来なかつたのである。優れた人材を集めるといふ黒田清隆の作戦は、こういう所にも及んでいた。

宿舎での食事は、朝夕は洋食、昼は日本食であつた。生徒一人当

たり支給される官費（二六円）の半分は、食費に当てられたという。それゆえ、彼らはひもじい思いもせず、勉学に集中出来たのである。快適な宿舎、それに前述したような作業服も含めた衣服も与えられ、勉学条件は十全で、実に恵まれていたと言えよう。

前年入学の第一期生は十六名、彼らは直接クラークから教えを受けた生徒たちである。彼らはクラークの人格を通してのキリスト教信仰を素直に受け止め、信仰告白をしていた。後述するところだが、彼等はそれを第二期生に対して、強制的に伝えるという手に出るこゝとなる。

鑑三は宿舎の割り当てで、宮部金吾と同室になる。宮部によると、「当時寄宿舎の規定で、各学年毎に室を更へ、また同時にコンビネーションも更へることが出来る様になつてゐたが、私共両人は室は変つても離れることなく、四年間一緒に居て、最も平和な楽しい生活を共にすることが出来た」という。以後鑑三は宮部と生涯深い親交を結ぶようになる。後章（第十一章『羅馬書の研究』の出現）でも触れるが、鑑三の名著『羅馬書の研究』の扉には、この宮部金吾への献辞のことが記されている。

時代は確実に動いていた。この年一月に起こつた西南戦争は、いまだ終わつていなかったといふものの、新政府の勝利は疑いがない状況であつた。ヨーロッパでは、ロシアとトルコが戦いを交えていた。そうした中で札幌農学校は歩み始めていたのである。新時代を担う有為な青年の育成という大きな目標をもって、学校は第二期生を迎えた。その音頭取りに当たつたのは、黒田清隆である。

黒田は薩摩藩出身の有力官僚であつた。彼は一八四〇（天保一）年十一月九日の生まれで、戊辰戦争、それに西南戦争でも参謀を務

め戦功があり、大久保利通亡き後、新政府の中心人物として、農相・通相・首相・枢密院議長などを歴任した。晩年は醜聞事件や疑獄事件なども起こしているものの、北海道開拓使長官としての功績は大きい。札幌農学校の開設も、その一つであった。一八七七(明治一〇)年、彼は三十七歳になっていた。人生のまさに脂の乗った時期である。当時の国家予算の一年分に相当する一千万円が投じられた札幌の開拓事業は、壮大なもので、札幌農学校の創設もその計画の中に組み入れられていたのである。

二 ウィリアム・スミス・クラーク

内村鑑三が札幌農学校に入学した時には、すでに述べたようにクラークは札幌農学校を去り、日本にいなかった。が、クラークは大きな感化を一期生に残して、日本を去ったのである。二十一世紀のこんにちに於いても、彼の残した *Boys, Be Ambitious* (少年よ、大志を懐け) の名言は、よく知られている。クラークとはいかなる人物か。一応粗描しておこう。

ウィリアム・スミス・クラーク (William Smith Clark) は、一八二六年七月三十一日、アメリカ合衆国マサチューセッツ州アッシュフィールドという小村に生まれた。父は医師で、その長男としての出生であった。マサチューセッツ州のウィリントン神学校で教育を受け、一八四四年、同州のアマースト大学に入学。卒業後母校のウィリントン神学校で化学を教えた。その後化学と植物学を学ぶため、ドイツのゲッティンゲン大学へ留学、一八五二年、博士の学位を取得している。成績は優秀だったとされる。その後二十代の若さで、

母校アマースト大学の教授となり、分析化学と応用化学を教え、さらに動物学と植物学も担当した。彼は農業教育の重要性に目覚め、科学と実践農学部学部長、そして学長となる。また南北戦争をさき、マサチューセッツ農科大学学長にも就任している。

クラークを札幌農学校に招くのに力を尽くしたのは、新政府の駐米特命全権公使の吉田清成^{きよなり}であった。吉田は幕末の薩摩藩士で、一八六五(慶応元)年に藩の留学生としてイギリス・アメリカに留学。帰国後は大蔵省に出任した。一八七四(明治七)年には、アメリカ駐在特命公使に任命されている。その時期に人格・識見共に優れたクラークを知り、黒田清隆の懇請に応え、札幌農学校の教員に斡旋したのである。前述のようにクラークは、日本の学校での職務は、教頭としての招聘であったが、就任交渉では英語の *President* (校長) が黒田によって認められ、実質的にもクラークに教育上の実権が与えられた。クラークは未知の国、日本の高等教育に関心を示し、その上での赴任であった。彼は日本の札幌という新開拓地に着くや否や精力的に活動を開始する。

クラークは、ウィリアム・ホイラーとデイヴィッド・ペンハローという二人の若い教師を同道してきた。二人とも二十代の若さで、クラークによく仕えた。クラークが日本に単身赴任したのは、一年の約束(往復の旅も含めて)であったが、その給料は、原田^{かずふみ}の『お雇い外国人』によると、年俸七千二百円、月給にすると六百円である。二十代の二人の外国人の給料も高く、彼らは破格の待遇で招かれたことになる。

もともと右の原田の本では、中国人のお雇いは、給与が非常に低かったことが報告されているから、これは欧米人のお雇いに限った

ことである。すると当時の欧米諸外国と末期の徳川政権、それに明治新政府が結んだ各種条約同様、お雇い外国人（欧米人に限る）の給与は、不平等の最たるものであったのかも知れない。当時、日本人教師が欧米で日本事情を語ったり、日本の伝統文化を説いても、このような待遇は、決して得られなかったであろう。しかしながらクラークたちは、そうした高額な待遇にふさわしい活躍をすることになる。

未だ飛行機旅行などなかった時代である。家族と別れ、単身彼は旅立った。まずは八日間もかけて、アメリカ東海岸から西海岸への旅があり、次に危険な太平洋の船旅を二十八日もかけて行ったのである。途中ハワイに立ち寄ったとはいえ、日本への長い旅は、容易ではなかったろう。そう考えると、年俸七千二百円も納得できる金額だったのかも知れない。クラークとその助手たちは、日本に着くや、あたらしい職務に誠実に取り組むこととなる。一年という期限付き勤務とはいえ、高額給与のことも考えると、真剣ならざるを得ない。札幌に着くやいなや、彼らは精力的に活動を開始した。

札幌は今でこそ、北海道唯一の政令指定都市として一九四万の人口を擁する大都会に発展しているが、維新当時は、人口三千人弱ほどの小さな村に過ぎなかった。北海道そのものも、維新までは日本本土とは遠く離れた蝦夷地であり、大和朝廷にも服従しなかった人々の住む地とされた。

が、維新後その重要性が新政府によって認識され、一八六九（明治二）年には蝦夷地は北海道と改称され、札幌はその中心都市として計画的に作られた都市となった。札幌を中心とした北海道開拓事業には、前述のように、当時の国家予算一年分にも相当した一千万

円が投じられた。札幌農学校はその事業の一環として計画され、運営は、五十一歳のアメリカ人、ダブリュー・エス、クラークに託されたのであった。

札幌農学校は、一八七六（明治九）年八月十四日、開校式が挙げられた。開校直後、クラークは十数名の第一期生に対して一場の訓辞をした。よく知られたその内容を、大島正健の『クラーク先生とその弟子たち』から引こう。

この学校の前身である札幌学校には極めて細密な規則があつて生徒達の一举一動を縛っていたようであるが、その内容には非難すべき点は一つもない。然し自分が主宰するこの学校では、その凡てを廃止することを宣言する。今後自分が諸君に臨む鉄則は只一語に尽きる。

Be gentleman

これだけである。

ゼントルマンというものは定められた規則を嚴重に守るものであるが、それは規則に縛られてやるのではなくて、自己の良心に従つて行動するのである。学校は学ぶところであるから、起床の鐘が鳴つたらベッドを蹴つてとびおきねばならぬ。食卓へ行く時には合図をすらすらと蹴つてとびおきねばならぬ。食卓へ行く時には合図をすらすらと蹴つてとびおきねばならぬ。消灯時間には一斉に燈火を消して眠につかねばならぬ。出処進退すべて正しい自己の判断によるのであるから、この学校にはやかましい規則は不必要だ。

大島は右のクラークのことばを示した後、「思いもよらぬクラーク

ク先生の宣言を聞いた生徒たちは非常に喜んだ。「我々はこれでもゼントルマンであるから俯仰天地に恥じない行いをしなければならぬ」と自ら問うて自ら答え、町へ出て醜い行為は決してなさず、自己の行動に対して大なる責任を感じるようになった」と回想する。大島はクラークの外見を、「中肉中背ではあったが、筋骨達しく、一種おかし冒しがたい威厳のある風貌を具えていた」と評するが、この外見も一期生には強く作用した。

クラークは札幌農学校の倫理・道徳に聖書を用いることを、赴任に際して黒田に提案し、黒田はそれを黙認した。そして一期生には、聖書が一冊ずつ与えられたことが知られている。そのことは、太田雄三『クラークの一年 札幌農学校初代教頭の日本体験』に収録された、クラークのキャプテン・ウィリアム・B・チャーチル宛書簡(二八七六・二・一九付)の一節において、実証される。クラークは以下のように記していた。

神は私に黒田長官に関して特別な恵みを与えてくれました。

黒田長官は東京にある日本政府の最も勢力のある高官の一人であり、北海道においては彼の意志が最高の権威を持っている人です。この夏、長官と一緒に旅行中、私は彼と宗教について自由に語り合い、最後に農学校で聖書を使用する許可を求めました。彼は、個人的には異議はないけれど、法律と政府高官の意向の手前聖書使用は禁止せざるを得ないと応えました。私は彼に聖書は書物中の最善のもので、日本でも遠からず他の文明国におけるようにきつと聖書が教えられるようになるに違いない、長官が彼の新設の農学校に聖書を導入するのを許せば、大

いに彼の誉れとなるだろうと言いました。彼はそれに対して、私が聖書の含む真理を学生に教えるのは構わないが、聖書をみんなの前で読んだり、個人的使用のために学生に聖書を配ったりするのは困ると言いました。私は、それは非常に残念だ、と言うのは、私は既に聖書を三十冊持っているから、でも命令には従います、と答えました。それから一か月後長官は私を呼んで、学生によい道徳教育を施してもらいたいと言いました。私は、自分は聖書に絶えず言及せずに道徳を教えることは出来ない、だから道徳を教えると長官を怒らせるようなことになるのではないかと恐れる、と答えました。翌日彼は聖書の使用禁止は撤回する、思うようにやってよろしいと私に言いました。それで私は手持ちの聖書を配って、それらを活用することになりました。さて、注意することがあります。あなたはこのことが全然新聞に出ないように気を付けて下さい。そうでないと波風が立つかも知れません。ご承知のように日本は台風の国ですから。

クラークは農業実習を重視した。そして一時間に五銭の報酬を払った。労働に対する報酬の意味を、彼は教えようとしたかのようである。族籍が士族で、「武士は食わねど高楊枝」「武士の子は金銭を愛せず」をたたき込まれて育った士族の子弟が多かった生徒たちに、クラークは正当な報酬の意味を教えようとしたのである。農業実習は一週間に二回あって、一回三時間ほどが当てられていた中で、生徒は一ヶ月一円五十銭ほどの金銭を報酬として受け取ることとなる。士族倫理のもと育った者が多かった札幌農学校の生徒たち

には、当初はその意味が理解できなかったものの、やがてそれを自らに正当報酬として受け取るようになる。

札幌農学校でのこの体験は、以後、内村鑑三の生涯を支配する。彼は自分をサポートする人々には、必ずそれなりの報酬をしつかり支払うことになる。彼は藤井武や畔上賢三ら優れた弟子をもち、きびしい仕事を課したが、それに対し鑑三は、きちんと報酬を払っているのである。他にも例を挙げるなら、その弟子矢内原忠雄が初の著作『基督者の信仰』を一九二二(大正一〇)年七月に、鑑三のかかわる聖書研究社から出した時、わずか五〇〇部の本に対して、十パーセントの印税五十円を外遊中の留守宅に送るといふ行為にも現れている。矢内原忠雄は後年次のように書いている。

私はロンドンに居て、新居浜教友から出版についての同意を求められ、承諾の旨返事しただけで、自分では何もせず、万事教友と黒崎さんと内村先生の愛によつてこの書物は出版された。だから、初版本には私の序文もない。出版後、聖書研究社から印税五十円を私の留守宅に送つて下さつたことを家人から知らして来た時、私は先生の物堅いのに感動した。⁹⁾

矢内原忠雄は鑑三の「物堅い」行為を強調しているが、それは武士的「物堅い」という面もむろんあろうが、札幌農学校時代の学生時代に養われた、「正しい労働に対する正当な報酬」といふ近代的金銭感覚から来るのであろう。このことは特筆しておきたい。

さて、クラークは農業実習や英語での生物学や動物学の講義、それに聖書を用いての道德教育をするばかりか、一八七六(明治九)

年十一月二十九日の日付で生徒たちに禁酒禁煙の誓約書(Pledge)に署名させることになる。よく知られたPledgeは、英文で次のようなものであった。短いものゆえ、全文を英文で引用する。

Pledge

The undersigned officers and students of the Sapporo Agricultural College hereby solemnly promise to abstain entirely from the use, in any form, except as medicines, of opium, tobacco, alcoholic liquors and also from gambling and profane swearing so long as we are connected with the institution.

Nov. 29th, 1876

次いでクラークは、二期生の入学する半年前の一八七七(明治一〇)年三月五日、これも自ら英文で作成した「イエスを信ずる者の契約」に、一期生全員の署名を求め、成功する。この「イエスを信ずる者の契約」は、後年、有島武郎が日本語に翻訳し、鑑三主宰の雑誌『聖書之研究』に載せているので、その文章で示そう。¹⁰⁾

イエスを信ずる者の契約

茲に署名する札幌農学校の学生は基督の命に従ふて基督を信ずる事を告白し且つ基督信徒の義務を忠実に尽して祝す可き救主即ち十字架の死を以て我儕の罪を贖ひ給ひし者に我儕の愛と感謝の情を表し且つ基督の王国拡がり栄光顯はれ其贖ひ給へる人々の救はれん事を切望する故に我儕は今より後基督の忠実な

る弟子となりて其教を欠なく守らんことを厳かに神に誓ひ且つ互に誓ふ我儕は適當なる機会来る時は試験を受けて受洗し福音主義の教会に加はらん事を約す

我儕は信ず聖書は唯一直接天啓の書なる事を又信ず聖書は人類を導きて栄光ある来世に至らしむる唯一の完全なる嚮導者なる事を

我儕は信ず至仁なる創造者正義なる主権者最後の審判者なる絶対無限の神を

我儕は信ず凡て信実^{まこと}に悔改めて神の子を信じ罪の救を受くる者は身を終るまで聖霊の佑導を受け天父の眷顧を蒙りて終に贖はれたる聖徒となり其の喜を受け其業を勤むるに適ひたる者とせらる可し左れど凡て福音を聞きて信ぜざる者は必ず罪に亡びて神の前より長へに退けらるべき事を

次に記する誠は我儕如何なる辛酸を嘗むるとも終身是れを服膺履行せんことを約す

爾精神を尽し力を尽し主なる爾の神を愛す可し又己の如く爾の隣を愛すべし

生命あると生命なきとに係らず凡て神の造り給へるものに象りて彫みたる像若くは作りたる形を拝すべからず

爾の神エホバの名を妄りに云ふべからず

安息日を覚えて之を聖日とせよ此日には凡て緊急ならざる業務を休み勉めて聖書を研究し、己の徳を建つるために用ゆ可し

爾の父母と有司に従ひ且つ之を敬ふべし

詐欺、窃盜、兇殺、若くは他の不潔なる行為をなすべからず
爾の隣を害すべからず

断えず祈るべし

我儕は互に相励さん為此の聖約^{すゝめ}によりて一個の団体を組織し之を「イエスの信徒」と称し而して我儕処を同ふする間は毎週一回以上共に集りて聖書若くは宗教に關する他の書籍雜誌を読み若くは宗教上の雑談を為しまた相共に祈祷会を開く事を誓約す希くは聖霊我儕の心に臨みて我儕の愛を励まし我儕を真理に導きて救を得るに至らしめんことを

一千八百七十七年三月五日於札幌

ダブリュー、エス、クラーク

言うまでもなくこの「契約」(誓約)は、キリストの誓約にモーセの「十戒」を補足として加えたものである。それは武士道的倫理観を持った大多数の学生に、受容可能な倫理規範として提示されたのであった。クラークは植物学や動物学に通じた学者であったが、同時に優れた教育者でもあった。同時に彼は学校経営者としての手腕にも独特の才覚を示した。

ところで、一年にも満たぬ間に、クラークは札幌農学校の基礎を築き、札幌を去ることになる。最初からの約束であったからだ。彼が札幌にいたのは、わずか八ヶ月、その間に一期生に与えた彼の感化は大きかった。クラークは熱心に教育と学校運営に励んだ。それは満足いくものであった。先にあげた太田雄三の『クラークの一年』に収録されたいくつものクラーク書簡には、彼がいかに赴任当初から札幌農学校の運営に、力を尽したかを語る。妻宛の一八七六年九月十日付の書簡には、次のような近況報告が記されている。

私はすばらしい時を過ごしています。そしてどれだけ私が信頼されているか、どんな責任を私が日々背負いこんでいるかを思っただだ身を震わせています。気候は快適で私の健康は申し分がありません。農学校での仕事はとても愉快で、私の側での何の努力も要しません。学生達はこれ以上は望めないほど善良で熱心であり、また非常に礼儀正しく、指導に対して非常な感謝の意を表わすので、アメリカの学生はまるで野蛮人のように思えてくるほどです。学生達はみな官費で勉強している学生です。だから、私達は好きな数だけ学生を採ることが出来ます。私達は周辺の地域に植物採集に出かけ、多くの興味ある植物を見つけます。

時は札幌の一番いい季節の秋、クラークは縦横無尽の活躍をはじめた。札幌農学校の初期計画は、すべて順調に運ぶ。同年十月二十二日付、家族宛の便りに彼は、「私は本当にわずか三か月の間に一年かけてもやり遂げることが出来ようとは思えなかっただけの仕事をしてしまったように感じます」と書き付けている。彼は実質八ヶ月の札幌滞在中、働きまくった。そして一期生の学生にキリスト教を語り、信仰に入るよう勧めた。小原信『内村鑑三の生涯』は、クラークの信仰を評して、「クラークのキリスト教は、純朴粗野なものであり、形式にこだわらない、自己流で型破りなところがあった。しかし、それが武士の子弟の多かった無骨な若者たちにはかえって新鮮な魅力となった」というが、短期間に学生の心をとらえた「クラークのキリスト教」には、明快で、単純、そして力強いものがあつたと思われる。

クラークは牧師ではなく、一信徒であつた。教派の規則や憲法に縛られることの少ない単純素朴な信仰が、彼を支えていた。それは後年の内村鑑三の無教会主義のキリスト教とも重なる。加えるに彼には、もともと強いカリスマ性があり、それが開拓地札幌で花開く。彼は学生一人ひとりに英文の新約聖書（それは太田雄三の「クラークの一年」によれば、東京を発つ前に、宣教師L・H・ギユリックから学生に与えるよう貰ったものとされる）を与え、道徳の教科書として用いた。

クラークの信仰は、迫害で新天地のニューイングランドに逃れたピューリタンの流れを汲むものであつた。彼は宣教師（牧師）ではなかつたが、平信徒伝道者としての資質に恵まれていたようだ。聖書を講義するときは、「北のはてなる氷の山／照る日にやぐる真砂の原」（現行讃美歌二四番）を歌い、学生にも斉唱させたという。「北のはてなる……」には、東京から来た学生には、未開の地札幌を思わせたことだろう。

また、クラークは、「いさおなき我を／血をもてあがない」（現行讃美歌二七一番）という歌曲が好きで、絶えず口ずさんでいた。彼の背は高い方で、声は太いバスである。多くの学徒は、この指導者の挙措の虜になつてしまう。

クラークは聖書の講義と讃美歌、そしてその人格的魅力によって、札幌農学校第一期生全員をキリスト教信者にしてしまう。彼は先に掲げた「イエスを信ずる者の契約」に署名させる。帰国に際しては、先にも記したように、「Boys, be ambitious（少年よ、大志を懐け）の有名なことばを遺す。また、函館在住のメソジスト監督教会の宣教師ハリスに、彼らの洗礼を委ねた。彼らはハリスの指導を受け、半年後の九月二日、洗礼を受けている。

三 イエスを信ずる者の契約

一八七七(明治一〇)年九月十五日、土曜日、内村鑑三・太田稲造・宮部金吾ら札幌農学校第二期生の授業が開始された。すでにクラークは去っていたが、その強烈な信仰の息吹は、学内に満ちていた。先の「イエスを信ずる者の契約」には、大島正健によれば、第一期生全員が以下の順序で署名したという。

黒岩四方之進・伊藤一隆・山田義容・佐藤昌介・内田静、田内捨六・中島信之・大島正健・渡瀬寅次郎・柳本通義・小野兼基・佐藤勇・安田長秋・出田晴太郎・荒川重秀・小野琢磨

大島は語を継いで、「右の内、安田長秋・小野琢磨は半途退学し、山田義容は卒業間際に不祥事に座して退学を命ぜられ、第一期生として卒業の栄冠を得たのは十三名となった。出田、田内、中島、佐藤勇の四名は卒業後間もなく早世し、残る者の中で世を終るまで信仰を棄てなかったのは、佐藤(昌介)、伊藤、内田、柳本、渡瀬、黒岩、大島の七名に過ぎないこととなった」と記している。

クラーク去った後の札幌農学校は、ホイラー(教頭)とペンハローという二人の有能なアメリカ人と長尾布山という日本人の国漢の教師によって新学年が開始された。また、新たにブルックスという農業実習の教師が加わる。講義は漢学以外の化学・英学・代数は、アメリカ人講師による英語であった。これらは午前中に組まれており、午後は農場実習である。

また、大島は「新学年の授業は九月十五日から始ったが、間もなくホイラー教授より、第二期生の中の有志者は、クラーク先生が

校是として書き遣された禁酒禁煙に署名すべき旨を勧告された」ともいう。第二期生に示された誓約書(Pledge)には、教師としてのホイラーとペンハローと新任のブルックスのほか、上級生である一期生全員が署名していた。これには特に異議を呈する者もおらず、全員が署名したとのことである。

ホイラーはクラーク持参の英文聖書の残部を新入生一人ひとりに手渡した。信仰に燃えた第一期生は、受洗後約二週間後に迎えた新入生に対し、早速、伝道を試みる。激しい、そして絶え間ない宣教の攻撃であった。それがどんなものであったかは、鑑三自身の回想「余はいかにしてキリスト信徒となりしか わが日記より」(原文は英文、山本泰次郎・内村美代子訳による)によって示そう。

当時、私は新設のある国立単科大学の新入生となっていたが、上級生の全部は(まだ全校で二学級しかないころであった)、ニューイングランド出のあるクリスチャン科学者の努力によって、すでにキリスト教に回心していた。「赤ん坊くさい新入生」に対する二年生の権柄(けんがら)ずくの態度は、世界中いずこも同じことであるが、その上にさらに新しい宗教的情熱と布教の精神とが加わる時、あわれな「新入生」の受ける印象がどんなものとなるかは容易に想像できるであろう。彼らは強襲(ゴースト)によって新入生を回心させようと試みた。しかしこの新入生の中に、一人だけ、ただに「二年生の突撃」(この場合は杖をもってする突撃ではなく、宗教をひっさげのそれであるが)の一斉襲撃を食いとめるのみか、反対に、彼らをもとの信仰に再回心させることができると考えている者があった。しかし、ああ！ 周囲の勇士たちは

つぎつぎに陥落して敵に降伏しつつある。私はただひとり、「異教徒」、忌むべき偶像信者、度しがたい木石の崇拜者として残されてしまった。あのときに自分が追い込まれた窮境と心細さとを、私は今でもよく覚えている。ある日の午後、私は郊外のある異教の神社に詣でた。それは、この地方の鎮守として政府が公認したものといわれていた。目に見えぬ神霊の象徴である神鏡にほど近く、枯れ草の上に身を投げ出して、堰を切ったように私は祈りはじめた。真心こめたその祈りは、後年私がキリスト教の神にささげたどんな祈りにも劣らぬほど純真なものであった。私は鎮守の神に向かって、学校内の新しい宗教熱を速かに消しとめ、邪神を捨てることを頑として拒む輩を罰し、今、自分のささえている愛国の大義に関する小さき努力を助けたまえと祈ったのである。祈祷を終わって私は寄宿舎に帰った。新宗教を進ぜよという、あのいとわしい強迫に再び悩まされるために。

だが、十六歳の鑑三は、結局、抗しきれなかった。上級生の権威は、札幌農学校でも絶対的であり、しかも彼らは伝道の熱に浮かされており、激しい襲撃で下級生ひとり一人に迫った。右に続く文章で、鑑三は次のように書いている。

しかし私に対する学校内の世論は実に強硬で、私の力をもってしてはそれに逆らいきれなかった。その結果、私は上級生たちによって、むりやりに左の誓約書（筆者注、「イエスを信ずる者の誓約」）に著名させられてしまった。それはちょうど極端な禁

酒主義者が、手に負えない酔っぱらいを説き伏せて、禁酒誓約書に署名させるような具合であった。私はついに屈服して、署名した。私は今でも、あんな威圧に屈すべきではなかったのではないかと、時折り自分に問うことがある。しかし当時の私はわずか十六歳の少年であったのに対し、「加入せよ」と強制する上級生たちは皆はるかに年長だったのだ。こういうわけで、キリスト教への私の第一歩は、自分の意志に反して強制されたもので、実を言えば、多少自分の良心にも反したものであったのである。

ここで鑑三は、「キリスト教への私の第一歩は、自分の意志に反して強制されたもの」「自分の良心にも反したものだ」と書く。このことに関して鈴木範久は『内村鑑三日録1 青年の旅』（教文館、一九九八・二）で、鑑三のキリスト教受容の背景を札幌農学校という、旧来の制約から「空間的には大きく解放されていた」共同体の中の事件と捉える。その上で「孤立した新しい共同体において、親友が次々と署名してゆく状況にあつて署名を拒めば、それは新しい共同体からの疎外を意味した。いわば著名が札幌農学校への入社式（イニシエーション）にあつたのである」との新鮮な見解を示す。鑑三自身は後年になって、そこにも神の摂理が働いていたのを知るところになる。

結局「イエスを信ずる者の誓約」に署名したのは、第二期生十八名中十五名であった。その名を記すと、

太田（新渡戸） 稲造・佐久間信恭・宮部金吾・足立元太郎・高木玉太郎・広井勇・内村鑑三・町村金弥・南鷹太郎・藤田九三

郎・村岡(鶴崎)久米一・諏訪鹿三・岩崎行親・伊藤英太郎・伊藤鏗太郎

この中で内村鑑三・太田稲造・宮部金吾・足立元太郎・広井勇・高木玉太郎・藤田九三郎の七名は、翌年一八七八(明治一)年六月二日の日曜日、函館のメソジスト監督教会宣教師ハリスから洗礼を受けた。当日の午前には、ハリスの説教を伴った礼拝があり、洗礼式は札幌の中心部を南北に流れる創成川の東岸にあった宣教師館で行われた。鑑三はその日のことを「余はいかにしてキリスト信徒となりしか わが日記より」に次のように記している(こゝも山本泰次郎・内村美代子訳で示す)。

永久に「忘れ」得ぬ日。H氏はアメリカから来ているメソジスト派の宣教師で、一年に一回、信仰上のことでわれわれを助けるためにおとずれるのである。彼の前にわれわれがどんなぐあいにしてひざまずいたか、またわれわれの罪のために十字架につけられしキリストの名を告白せよと言われたとき。堅い決心のうちにも、どんなにふるえながら、アーメンと答えたかを、私は今でもよく覚えている。

なお、誓約(契約)に署名はしたものの、南鷹次郎・岩崎行親・町村金弥らは受洗しなかった。鑑三は洗礼の後に、「新しい人」になったことを自覚する。そこから来る決意を、彼はこれまた「余はいかにしてキリスト信徒となりしか わが日記より」に記すことになる。以下のようなようだ。

洗礼を受けたわれわれは新しい人になったことを自覚した。少なくともそう自覚したい、またそう思われたいと努めた。その上、われわれはもうひと月とたたぬ間に、「新人生」という肩身の狭い名を捨てて、下級生の若い兄弟たちを迎えなければならぬのだ。クリスチャンで、しかも二年生とあるからには、もっと大人らしくふるまって、行動においても、不信者や新入生の模範となるべきではないか。

カトリックや聖公会、それにプロテスタントのメソジスト派やルター派などでは、受洗の際に聖書中の人物にちなんでの名をとっての洗礼名、いわゆるクリスチャン・ネームをつけることがある。聖書辞典などを用いて選択するのである。神父や牧師が選んで受洗者につけるばあいが多いが、本人が選ぶケースもある。鑑三は旧約聖書サムエル記に見られるダビデの親友ヨナタンの名を自ら選んだ。ヨナタンは友情を尊んだ人物として知られる。

このクリスチャン・ネームについて鈴木範久は、「内村が洗礼名として友情をあらわすヨナタンを選んだところに、そのキリスト教入信の性格も語られている。それは、肉親の兄弟にまさる、他者とのこまやかな愛の関係を選ぶことであつた」と記す。ついでに鑑三と共に受洗した同級生の名前とクリスチャン・ネームを記すと、太田(新渡戸)稲造はパウロ、宮部金吾はフランシス、足立元太郎はエドウィン、広井勇はチャールズ、高木玉太郎はフレデリック、藤田九三郎はヒューであつた。

それにしても「イエスを信する者の契約(誓約)」への署名は、鑑三にとつて「私の意志に反して強制されたもの」であつた。けれど

も、そこに神の摂理が働いていたことを彼は覺つていた。それはのち、留学先のアマースト大学でシーリー学長に邂逅し、回心を経験した時にも感じたことではなかっただろうか。

四 学友たち

札幌農学校の学年歴は、九月授業開始にはじまる前期と、翌年一月授業開始の後期に分かれていた。第二期生の前期授業が終わり、成績発表のあったのは、一八七七(明治一〇)年十二月二十六日であり、鑑三は試験成績第一位であった。友人の宮部金吾は二位、高木玉太郎は三位、岩崎行親は四位、広井勇は五位、太田(新渡戸)稲造は七位、藤田九三郎は九位、足立元太郎は十位である。後年、矢内原忠雄が学んだ神戸一中の校長となる村岡(鶴崎)久米一は、十七位であった。「イエスを信ずる者の契約」に署名した者は、学業の外に日曜日には、礼拝や祈祷会や聖書研究の時間を持った。

鑑三とともに受洗したのは、第二期生で七名である。鑑三の他は、前述のように、太田(新渡戸)稲造・宮部金吾・足立元太郎・広井勇・高木玉太郎・藤田九三郎である。この学友たち一人ひとりについて、鑑三は『余はいかにしてキリスト信徒となりしか わが日記より』で、寸評を加えている。紹介しよう。例として、早世した洗礼名ヒューこと藤田九三郎の場合を、本文からその全文を引用する。

われわれの中の最年長者はヒューである。彼は数学者でまた工学者であり、いつも実際の、金もうけをもくろんでいる。

もちろん、それはクリスチャンらしい目的からではあるが、彼は、実生活の上で人を公明正大にする力さえあるならば、キリスト教の理屈については、あえて深入りする必要を認めぬという意見を持つていた。彼はあらゆる卑劣と偽善とをにくんだ。そして彼の機略縦横な機転やじょうだんは、集会の席でしばしば独特な痛いきずを犠牲者に追わせた。彼は教会の経済方面の頼もしい支持者で、たびたび会計係を勤め、数年後にわれわれが新しい教会堂を建てた時には、その「材料の強度」を計算してくれた。

以下、簡略化して「余はいかにしてキリスト信徒となりしか わが日記より」の本文から摘記するなら、洗礼名エドウィンの足立元太郎は、「彼は善良な男で何事にもまっさきに立つて働き、同情を求められれば、いつでも涙を流して応じ、つねに「準備委員」として教会のためにつくした。クリスマスや献堂式などのときには、万事をりっぱに美しく整えるために、しばしば「寝食を忘れ」るほどであった。神学の研究は彼の任ではない」とある。洗礼名フランシスの宮部金吾は、「仲間のうちでもっとも円満な性格の持ち主」で、「誰に対しても悪意を抱かず、すべての人に愛情を寄せ」た。「彼は生まれながらの善人だ。だから彼には善人になろうと努める必要がないのだよ」と記される。さらに「われわれはつねに語っていた。彼のいることが、平和を意味した」と。

残り三人への評を、駆け足で目を通すと、フレデリックの高木玉太郎は、「この年ごろの少年には珍しい鋭敏さと洞察力を持つていた」とされ、「彼の語学の才はすばらしく、独学でドイツ語とフ

ランス語とを修め、シルレルや、ミルトンや、シェークスピア等を原語で味わうことができた」とあり、パウロの太田(新渡戸)稲造に対しては、「パウロは「学者」だった。彼には神経痛の持病があり、また近視眼でもあった。彼はあらゆる事物を疑うことができ、新しい疑問を製造することができた。また何事をも、試験し証明してやらなければ信ずることができなかった。彼はトマスと名乗るべきであったのだ。しかし眼鏡をかけてすっかり学者ふうを装ってはいても、心は無邪気な少年だった」とある。チャールズの広井勇は、「複雑な性格を持っていた」とされるが、「教会の内なり外なりで何か実際の善事が企てられる時に、つねにたよるにたる」とされる。

鑑三の批評眼は鋭い。この自身を除く六人の人々への批評は、以後の彼らの歩みを暗示しているかのようである。藤田九三郎は早くして逝つので別とするが、足立元太郎は養蚕に力を尽くし、横浜生糸検査所所長に、宮部金吾はこれまでしばしば記したように、植物学者で、北海道帝国大学教授となつた。高木玉太郎は語学の才に恵まれ、のち事業を興し、成功する。太田稲造は新渡戸姓となり、後年矢内原忠雄や恒藤恭や芥川龍之介が学んでいた頃の第一高等学校校長となり、彼らに大きな人格的感化を及ぼした。前述のように、のち国際連盟事務局次長に就任、生涯を〈太平洋の橋〉として、日米関係にも大きな役割を果たすことになる。広井勇は開拓使御用係を経、アメリカ留学、帰国後札幌農学校助教となり、北海道庁土木課長を兼任、北海道開拓に大きく貢献。その後東京帝国大学教授に招かれた。

鑑三はこれら同時に受洗した仲間と、強い絆で結ばれることとなる。共に日曜礼拝を守るばかりか、日曜の夜は一期生の信者と合同

で聖書研究会をもつた。日曜礼拝は、これまた「余はいかにしてキリスト信徒となりしか わが日記より」によると、次のようである。¹⁶⁾

小さな教会はどこまでも民主的で、各自みな教会員として同じ資格を持っている。われわれはこれを、真に聖書的なまた使徒的なやり方だと思っていたから、集会の指導役は順番にみんなに廻ってきた。当たつた者は、その日の牧師であり、——その上にまた小使いでさえ——あつた。彼は自分の室を教会として、しつらえた上で、教会員を呼び集め、その並び方までを世話しなければならなかつた。彼一人だけが腰掛けにすわる事ができた。教会員は、彼の前の床にひろげた毛布の上に、純東洋風なすわり方で着席するのであつた。説教壇は、工学者のヒュー(筆者注、藤田九三郎)がメリケン粉だるに工夫を加えて作つたもので、われわれはそれに青い毛布をかぶせた。こうして威儀をととのえた上で、牧師は開会を宣して、祈祷し、聖書を朗読する。次に自分で短い話をしてから、羊の群れを一人一人順に呼んで、それぞれに感話を述べさせるのである。

鑑三はこの集会を「おもちゃの教会」(toy church)とも呼んだ。後年の無教会主義の礼拝を想わせるものが、早くも現れていたとしてよいであろう。彼らはまた週間祈祷会を持った。それは右に続く文章で、「水曜日の夜の九時半から開かれ」、「一同がかわるがわる祈りをするのである。集まりが終わるまでに一時間かかった」とあるような内容であつた。

土曜日の夜は、開議社という集いがあつた。ここでは英語や日本

語によるさまざまな話題が採り上げられ、演説や討論が行われたという。日曜の夜の佐藤昌介・大島正健・渡瀬寅次郎ら一期生との合同の聖書研究会では、彼らの「キリスト教の弁護と弁明」を聞き、終わるのを待ちかねて二期生だけで再度集会を持ったという。そして「一週間のうちで最も楽しいこの日を終わ」り、「再び元気をとりもどす」と彼は書く。日記を基にした鑑三の記述は、正確である。それにしても忙しい日々であった。

一八七八(明治二)年七月三日、彼らは一年生を修了した。鑑三の成績は相変わらずよく、学年首位である。これも「余はいかにしてキリスト信徒となりしか わが日記より」の七月五日の項には、「学業優秀に対する賞として、十七円五十銭を受け取る」とある。続いて「午後、級全員とともに劇場へ行く」と記し、以下のような感想が記される。

われわれは最初のうち、キリスト教と芝居見物とを切り離して考えていた。洗礼を受けてから二度目のこの芝居見物に際し、私の良心が何のうしろめたさをも感じなかったわけではない。しかし、これが私の生涯で、その種類のいかんを問わず、劇場なるものの敷居をまたぐ最後となった。後年、私は、クリスチャンが靈魂の幸福をそこなうことなしに劇場へ行くことができること、またその多くが実際に行くことを知った。もちろん芝居見物は姦淫罪のような罪ではないだろう。しかし、もしこのような「罪になる娯楽」なしにやって行けるものならば、私は心身にあまり害を受けないで、それから遠ざかることもまたできると思う。

追い追いつ述べることながら、内村鑑三は成績優秀、オールマイティとも言える能力の持ち主であった。彼は何事にも関心を示した。文学・哲学・宗教・歴史・美術・農業・水産・考古学・スポーツなど、ありとあらゆることに通じていた。ここで言う「芝居見物」とて、同世代青年にあつて、その鑑賞力ははず抜けていたものと思われる。が、鑑三は受洗後、「芝居見物」にうしろめたさを感じ出しているのだ。これは信仰の未熟さを覚つてのことだったのである。人は弱い。とかく流されやすい。聖書研究の集まりなどもあつて、宣教師ハリスから受洗した七人組は、他の級友以上に時間とられた。右の回想にはそうした彼らの置かれた状況なども反映しているであろう。

同年七月十四日には、級友と共に学校から約三〇キロほど離れた定山溪へ足を伸ばしている。ちよつとした旅行である。現在は温泉地としてもよく知られ、観光地となつている定山溪も、当時は行く人も稀な未開の土地であった。が、季節は夏。野宿を強いられたものの、彼ら若い学生には絶好のレクリエーションとなった。後に鑑三はこの小旅行を回顧して、「過去の夏 北海道の夏」と題した一文(『東京独立雑誌』(41号、明治三二・八・二五)を書き、次のように記している。

札幌に於ける第一の夏なりき、余は親友三名と共に余の始めての探検的遠征を試みたりき、(中略)
時に文明未だ深く北海道に入らず、豊平の桁橋を渡り、右に折れて白石村を過ぎ川の右岸に沿ふて森林を通過すればマコ

モナイの試験農場に出づるなり、公道は此処に尽き、原始的山林は此処に始まり、温泉行きとは云へ、車あるにあらず、駄馬の通ずるに非ず、山道七里、余輩一週日の糧を荷担し行かざるを得ざる事なれば此行決して風流人の勝地探求の類にあらざりき、殊に陰森密葉の間に蚋多く、其中を通過せんと欲せば面部を蔽ふに西洋婦人の為す如く面衣の類を以てせざるべからず、黎明旅装して校を出で白石村に至て夜の明くるに会ひぬ、顧みて同行者の装束を検すれば、藤田なるは脊に大鍋一個を負ひ、釣竿三四本其左右より突出し、而して全身を蔽ふに綿糸製の蚊帳を以てす、広井生は腰に鉋物試掘用の鉄槌を帯び、小鍋一個を肩に掛け、釣竿蚊帳又藤田生に異なる事なし、宮部生の背囊に塩あり、砂糖あり、梅干あり、且つ麵包菓子少々ありしと覚ゆ、而して釣竿蚊帳又前二者と異ならず、而して余は米二升を課せられ、三尺帯にて是を肩に掛け釣竿蚊帳他の三者の如し、惟ふ寿永三年春二月熊谷、平山、梶原、岡部等の関東武士が一の谷城門に肉迫して平家の腰抜け共を威嚇せし時は余輩四人の如くに装はれしならん、斯くてミスマップ辺にて麵包と砂糖とより成る昼食を了へ、密林蔦蘿の間を押し行けば、午後の一、二時頃目的地なる定山溪の温泉に達しぬ。

この旅は教師のペンハローの引率で、十四名の生徒が参加したが、右の文章では鑑三の他は、宮部金吾・藤田九三郎・広井勇の四人のように記されている。作品として文学化するには、引率者を除き、参加者四人に焦点化した方がよいとの判断が働いたためと思われる。鑑三の文章には、こうした処置がしばしば見られる。それゆ

えに文章は読みやすく、虚構化による事の真実性はいつそう増す。それは後の『基督信徒の慰』や『求安録』に至つて一のピークを迎える手法であった。

さて、鑑三ら七人組は、この年（一八七八・明治一）十二月一日の日曜日に、ハリスの所属するメソジスト監督教会に入会した。彼ら七人は常に行動を共にし、日曜日には集まって聖書研究をし、共に祈る生活をしている。忙しい生活の中でも彼らは勉学を怠らなかつた。二年生第一学期の成績は、十二月二十三日に発表された。順位は内村鑑三・宮部金吾・太田稲造・高木玉太郎・佐久間信恭・南鷹次郎の順である。

一八七九年、明治は十二年を迎え、彼らは札幌農学校第二学年を送つていた。鑑三は毎土曜日に開かれる開識社の集まりで、しばしば演説をするようになっていた。三月一日には「北海道ノ農業ヲ進歩サスルニハ如何ナル方法ヲ用ユルカ」を、四月二十六日には、「肺病論」を論じている。二年生修了時の鑑三の成績は、これまた優秀である。相変わらずトップであり、以下、宮部金吾・足立元太郎・高木玉太郎・佐久間信恭・南鷹次郎・伊藤英太郎・藤田九三郎・広井勇・太田稲造と続く。十月十一日には、これまでよく出席し、演説を引き受けることの多かつた開識社を太田稲造・藤田九三郎・佐久間信恭と四人して退会する。鈴木範久はこのことに関して、「理由は「日課多忙」と記録されているが、キリスト信徒たちの会合が増えてきたことによるのだろう」と想定している。

年が明け、一八八〇（明治二三）を迎え、彼ら受洗組に独立教会建設の気運が高まる。彼らに食指を延ばすメソジスト監督教会にも、イギリス教会宣教会（聖公会）にも属さない教会の建設である。

この年は、彼らの信仰が試される年となった。年のはじめの一月九日、鑑三は新教会建設委員に選ばれる。他の委員は、大島正健・渡瀬寅次郎・足立三太郎であった。鑑三は学問にも信仰にも精を出し、日々を歩む。

新教会建設をめぐり、彼らは教派主義の悪癖を嫌と言うほど知らされる。それは二十一世紀の現在にも通じる伝道上の問題であった。今日のプロテスタント各教派は、それぞれ独自の憲法・規則を持ち、それを絶対化し、信者を支配しようとする面がある。そして自派のみが正統で、他派は異端とまでいなくなるとも、その存在を理解できず、また理解しようともしない。悪しきセクト主義とでも言えようか。それはキリスト教の成立以来、ルターやカルヴァンの宗教改革を経ても、なお続く閉ざされたキリスト教会の実態である。教会建設に際して、鑑三らはそれに気付くようになる。彼らはそうした教派主義のエゴを排そうとすることになる。

新教会の建設の夢は、現実の教派主義からの離陸の意味があった。それは、紆余曲折があったものの、卒業を間近にした頃に、先輩大島正健の協力もあって、独立教会として実現しはじめる。教会建設の中心にいたのは、むろん内村鑑三であった。鑑三は四年生時代は、勉強以外の時間をほとんど教会建設の夢の実現に当てている。二年前から上京の折には、いくつもの教会堂を見て回つてもいい。教会建設の苦労は、「余はいかにしてキリスト信徒となりしかわが日記より」に詳しい。独立問題に関して、鑑三と一期生の大島正健が主導したことを証す箇所を、ここも山本泰次郎・内村美代子訳で示そう。

五月二十二日 日曜日 教会の独立は会員間の世論となりつつある。夜、O（筆者注、大島正健）と会い共に組織案をつくる。

五月二十三日 Oと会い、教会問題について相談する。そばの馳走になる。

独立に対する叫びは優勢になって来た。Oとヨナタン（筆者注、鑑三）とは、将来の独立教会のために組織法の草案をつくつた。二十代の若者二人が寄り合つて、ヨーロッパとアメリカとの最大の頭脳を惑乱させたこの仕事をやってみようというのだ！ 無謀きわまる！しかし勇気を出せ！「神は知者はずかしめるために、この世の愚かなる者を選び」である。

鑑三らの独立教会建設の願いは、曲折はあったものの、後述するようを実現する。彼ら信仰に燃えた若き集団を後年の史家は、札幌バンドと呼ぶ。

ところで、少し前、鑑三は札幌農学校の月刊雑誌『農業叢談』二号に、「米の滋養分」という論文を発表していた。統計比較表も含め、四ページほどのものである。鑑三初の公表された論文である。米の養分が麦や玉蜀黍と比較して、特に優れているとは言えないとして、冷温地での米栽培に疑問を呈したものとしてよい。勉学に教会建設に、彼は青春の情熱を燃やす。

この年六月二十六日、日曜日。札幌農学校における最後の安息日集会（礼拝）が持たれ、キリスト教を信じる者それぞれが、信仰告白をした。鑑三は「実に感動的な集まりであった」と言い、「四年の長いあいだ、暑い日にも寒い日にも、愛し合いつつ、時には憎み

合いつつ、集まり続けたこの「教会」も、いま解散されようとするのである」と「余はいかにしてキリスト信徒となりしか わが日記より」に書く。

こうした中でも、鑑三の成績は相変わらずよく、主席を譲らない。卒業時もむろんトップである。のちに鑑三は、「余はいかにしてキリスト信徒となりしか わが日記より」で、札幌農学校時代の学業成績と聖日の過ごし方に関して、以下のように書くことになる。²⁰⁾

われわれの学級クラスは、入学したときは二十一名であったが、病氣その他で、卒業の時は十二名に減っていた。そのうちの七人がクリスチャンであるが、卒業当日、上位の七席を占めたのはその七人であった。非クリスチャンの学友の、キリスト教反対の大きな理由となっていたのは、キリスト教が日曜日の勉強を許さぬということであった。事実、われわれクリスチャンはこの安息日を厳守し、試験はいつも月曜日の朝から始まったけれども、日曜日には、物理学、数学、その他、「肉」に属するすべてのものをなげやつてきたのである。しかも見よ！ 学校生活を終わるにあたってわらわれの全「点数」が合計されたとき、われら安息日厳守派は学級の上位の七席を与えられ、卒業演説を独占し、一つを除くほか、全部の賞与を持ち去つたではないか！ かくて安息日厳守の「実地上的利益」に関して、われわれはさらに一つの証拠を提供したのである。神の律法の一つとしての安息日厳守に、本質的価値があることは言うまでもないが。

わたし(筆者)が「余はいかにしてキリスト信徒となりしか わが日記より」を最初に読んだのは、高校時代のことである。当時から教会に通っていたが、試験の時はどうしても主日礼拝を休みたくなる。そうした時に右に引用した文章の「しかも見よ！」以下に触れ、覚醒された思いがよみがえる。鑑三の文章には、片言隻語であらうと人を動かす力がある。

一八一(明治一四)年七月九日、土曜日。午後一時から札幌農学校第二期生の卒業式が行われた。鑑三の成績は抜群であった。彼は札幌農学校時代、学業成績は常に一位の座を守り続けている。鑑三の勉強の有様を同室だった宮部金吾は、後年、次のように回想する。²¹⁾

内村君は頭脳が頗る明晰でありその記憶力の強大なる事は実に驚く可きものがあつた。勉強は規則正しくその努力も人一倍であつたが、試験の成績を見るに殆ど各学科に亘り最高点を取らないものはなかつた程で、恐らく札幌農学校開始以来内村君程最優等の成績を取つた者は他に一人もあるまいと思ふ。ある時植物学の試験があつた際、今度こそは僕が最高点を取らねばならぬと一生懸命に勉強したが、試験の成績が発表になつたのを見ると僕は九十三・六点で内村君は一〇〇点ではないか、実に驚かざるを得ないのである。

内村君は僕等のやうに試験間際になつて急に勉強をすると云ふやうなことは決してなく、試験の丸一週間前には総て準備が出来て居て、授業が済むと一人で散歩に出かけ歩きながら頭の中で答案を練つて置き、不審な処があれば帰つてからノートや

本を見るといふ風で、大体の準備は平素学期の半ば頃より始終前の方からの復習を怠らなかつた。それであるから試験場に入り、教師が黒板に第一の問題を書くとき後の問題などかえりみることもなく直に筆をとり、大きな字で非常な速度を以て答案を書き始め、何時もその紙数は我々のものの殆ど倍はあつた。この習慣即ち「規則正しい勉強」と「豫め準備をして置く」といふ事は、内村君の一生を通じて常に変わらずに保たれた。これは確かに同君の偉業の基を成した要素の一つであつたと思ふ。

卒業式の当日、彼は、「漁業モ亦学術ノ一ナリ」と題して演説(研究発表)した(『北大百年史 札幌農学校資料(一)』)というが、内容は定かでない。なお、「余はいかにしてキリスト信徒となりしか わが日記より」では、演題が「科学としての漁業」となっている。また、鑑三は卒業生代表として、校長(森源三)に感謝のことは述べた。当日、一年生として式に参列した志賀重昂は、次のように「日記」に書く。以下に引用する。²²⁾

終りて内村氏卒業生に代りて校長に多年教育の厚きを捧謝せらるる尋で御雇教師に捧謝せらる言、活発覚へず人をして動揺せしむ尋で三年生及び吾輩を奨励するの語あり嗚呼氏は耶穌教の徒なる故に常に吾輩と仇敵なりしが今日其慷慨悲憤の言辞を以て吾輩を奨励したりしは仇ながらも至誠の到然らしむる処覚へず感涙を催したり次に同級生に向ひ今吾輩は本校の学科を卒業したりと雖も決して蘊袍に安ずるものに非らず、之より艱難の道に入りぬべし今日は其艱難の途の門戸なり諸君よ請ふ安逸に

せず其屍を北海の浜に曝すの素志を棄つる勿れと謂ひ終りて衆為に泣き黙焉として前の如く一も拍手する者あらざりき賓客も知らずそゞろ涙を流されたるべし

鑑三の卒業後の進路は、動物学や水産学の研究にあつたようだ。二十七日、開拓使から御用掛として月俸三十円(年俸三六〇円)の辞令を受け取る。鑑三のほか広井勇・太田稲造・岩崎行親・町村金弥ら五名が、民事局勸業課に、宮部金吾・池田鷹次は学務局督学課に、足立元太郎は物産局博物課に、高木玉太郎は物産局精鍊課に決まる。身分は皆準判任官である。鑑三は二十歳になっていた。

前述のように、鑑三はこれら同級生と生涯強い絆で結ばれるが、特に「札幌三人組」と自ら名付けたように、太田(新渡戸)稲造・宮部金吾との仲は深かつた。その洗礼名ヨナタンに相応しく、鑑三は友情に厚かつた。卒業に際して三人は札幌の公園で、将来を二つのJ (Jesus Christ, Japan) のために捧げることが誓い合う。内村鑑三・新渡戸稲造・宮部金吾の三人の友情は、生涯に及んだ。鑑三が寄宿舎内では「ロン」と呼ばれていたとは、宮部の証言で、それは「Long Staff」長脛(ながかぶ)の省略である」という。宮部はまた「同君は世事慣れない処があり、一見粗野な処もあつたので「不意気」といふ綽名も附けられて居た」とも書いている。²³⁾

札幌農学校時代の鑑三を評して政池仁は、「内村鑑三を教育したものは、学校の教師ではなくて友人たちであつた。彼は実によき友人たちを持ち、彼らに影響されて信仰を養い、情操を聖めた」と言う。確かにそうした面はあり、そのことは他の学友たちにも当てはまることだ。

以下、駆け足で「余はいかにしてキリスト信徒となりしか わが日記より」を中心に、札幌農学校を卒業した一八八一（明治一四）年七月以降の鑑三の歩みを記しておこう。鑑三は農学校を卒業すると、ひとまず東京の自宅に帰省する。在学中からすると二度目の帰宅であった。鑑三はこの休暇中、首都の教会の建物と教会組織を学ぶことと、家族伝道とに励んだ。そうした中で彼は、自分たちの考えていた教会が「首都の諸教会の教育や教養と比較しても、決してそまつなものでなかった」ことに気付く。また、家族伝道では、当初かたくなにキリスト教を拒んだ父宜之の入信 続いて「従弟、叔父、弟たち、母、妹もみな父に続いた」と鑑三は書く。しかし、父はよしとしても、母や兄弟の伝道にはかなりてこずったこと、その兄弟との交わりが必ずしもなめらかではなかったことは、前章で述べたように、近年の研究が明らかにしているところだ。父の受洗は、鑑三が札幌農学校を卒業後のこととなる。

札幌に帰るに際し、鑑三は東京のわが家が決して裕福でないのを知っていたこともあって、すぐ下の弟達三郎を官費で勉強のできる札幌に同道することになる。両親の負担をわずかでも少なくするためであった。父宜之は、事業に失敗し、その上、病気の親族まで同居させるといふ状況にあった。幸い弟達三郎は、身体に多少の問題を抱えていたものの、知的能力はそれなりに備わっていた。無償で教育を受けることの出来る札幌農学校は、弟には適していると鑑三は判断したのである。

この年（一八八一）十月四日、九重丸に乗り、横浜を起航した鑑三と達三郎は、七日函館に到着、翌八日、七面山（函館山）で開かれた函館基督教信徒親睦会に出席し、演説（説教）をする。当初は

すぐ小樽に向かう予定であったが、台風のため足止めを食い、その間の飛び入りの演説となったのである。しかし、何事にも熱心で誠実であった鑑三は、頼まれるとしっかりと準備し、『旧約聖書』の「申命記」を用いて熱弁を振るつたとされる。鑑三は宮部金吾宛書簡に、その感想を記している。

札幌に戻ると、大島正健の骨折りで、「礼拝の家」が整えられていた。「余はいかにしてキリスト信徒となりしか わが日記より」には、「二階長屋の半棟で、それを二百七十円で手に入れた」とある。さらに「われわれはその二階の二部屋を他人に貸して、その室代を教会の一般経費の一部に当て、階下の全部を教会のために使った」ともある。現在の札幌独立キリスト教会の前身である。会堂は五人程度の収容能力きり期待できなかった。これまた「余はいかにしてキリスト信徒となりしか わが日記より」によると、その状況は以下のような。草創期の札幌独立キリスト教会の様子が活写されている。

この家の天井の高さは十尺しかなかったので、五十人、時にはそれ以上の粗野な声の合唱をほらんだオルガンの響きは、実におそろるべき調子はずれの震動となつて建物をふるわせた。壁つぎの隣家に住む人々の平和はこのために著しくそこなわれ、彼らはたえず、むりからぬ不平をこぼしていた。二階の住人のめいわくもまたひととおりではない！ 日曜日は一週間中の最善の日なので、兄弟たちは朝まだきからこの礼拝の家にやってくる。午後十時に夜の集會が終わつて、一同がそれぞれのおねぐらに引き上げるまで、この家には何かしら人声が絶えな

かった。われわれは生まれて初めて持った自分たちの家を、およそ家という概念にはない用い方で使ったのである。そのころ会員になった最年長の某氏は、この家を評して「宿屋」だと言った。それは、人生の旅路をたどる人々が、疲れた折り折りに元気を取りもどそうとして立ち寄る家という意味である。事実、彼は老年の忙しい生活の中で、休息を必要とするたびごとにしげしげとここに立ち寄っていた。教会は、読書室で、教室で、委員会室で、休憩室で、同時にまたクラブでもあったのだ。横隔膜も破れるほどの大笑い、魂の深奥に触れる悔い改めのすすり泣き、最も偉大でかつ最も堅実な頭脳をも悩ませるような議論、さては市況や金もうけの話までが、家と家の中で最も便利なこの家の中で聞かれた。これがわれわれの教会だった。これと同じものを、われわれは世界のどこにおいても見たことがない。

メソジスト監督教会のデヴィソンは、鑑三らが独立教会を目指しているのを知ると、当初融資した金子四〇〇〇ドル（五〇〇ドル説もある）の即刻返済を、手紙で求めてきた。デヴィソンの取ったこの不可解な仕打ちが、逆に鑑三らにひも付きの宣教教会でなく、真に日本（札幌）の地に根ざした独立の教会建設という願いを持たせ、ここに独立教会建設の夢が実現したのである。借金の返済には苦勞したものの、鑑三を中心とした人々により、翌年十二月二十八日に返済は完了している。

札幌市南二条西六丁目にあったこの教会は、当時、「白官邸」と呼ばれた。外壁が白く塗られた洋館であったからである。同年十月

に札幌YMCAが結成され、鑑三は副会長に指名された。鑑三が「われわれの小さな教会」と呼んだ「白官邸」の集会は、聴衆であふれる教会となっていく。

- 注1 新渡戸稲造「旧友内村鑑三氏を偲ぶ」「実業之日本」第三三卷八号、一九三〇年四月十五日。
- 2 宮部金吾博士記念出版刊行会編『宮部金吾』岩波書店、一九五三年六月一日収録。一三ページ
- 3 注2に同じ。三四ページ
- 4 注2に同じ。三五ページ
- 5 注2に同じ。三六ページ
- 6 原田一典『お雇い外国人③開拓』鹿島出版会、一九七五年二月一日。一一三ページ
- 7 大島正健『クラーク先生とその弟子たち』帝国教育会出版部、一九三七年七月五日、のち、遺族の大島正満・大島智夫による補訂版が出ている。新地書房、一九九一年二月一日。引用は補訂版による。九二～九三ページ
- 8 太田雄三『クラークの一年 札幌農学校初代教頭の日本体験』昭和堂、一九七九年八月三日。一四九～一五〇ページ
- 9 矢内原忠雄「私の伝道生涯」『橄欖』一九五六年六月、のち『矢内原忠雄全集』第二六巻収録。一八八～一八九ページ
- 10 有島武郎「札幌独立教会（二）」『聖書之研究』第一四号、一九〇一年一月二〇日。八〇～九三ページ
- 11 小原信「内村鑑三の生涯―日本的キリスト教の創造」PHP研究所、同文庫版、一九九七年六月一六日。一一八ページ

- 12 注7に同じ。一一七ページ
- 13 注7に同じ。一二八ページ
- 14 内村鑑三『余はいかにしてキリスト信徒となりしか わが日記より』山本泰次郎・内村美代子訳『明治文学全集39 内村鑑三集』筑摩書房、一九六七年二月二十五日。三四ページ
- 15 鈴木範久『内村鑑三日録1 1861』1888 青年の旅』教文館、一九九八年二月一〇日。七四ページ
- 16 注14に同じ。四三ページ
- 17 注14に同じ。四四～四五ページ
- 18 注15に同じ。八四ページ
- 19 内村鑑三『米の滋養分』『農業叢談』二号、一八八〇年二月。のち『内村鑑三全集』第二巻収録。三～六ページ
- 20 注14に同じ。五六～五七ページ
- 21 注2に同じ。七七～七八ページ
- 22 志賀重昂『札幌在学日記』『志賀重昂全集第七巻』志賀重昂全集刊行会、一九二八年二月二五日、三ページ
- 23 注2に同じ。七九ページ
- 24 政池仁『内村鑑三伝(再増補改訂版)』教文館、一九七七年十月三日、五五ページ
- 25 生地竹郎『内村鑑三とその弟・辰三郎』『内村鑑三研究2』一九七四年六月、小原信『内村鑑三とその兄弟』『青山学院文学部紀要24』一九八三年一月、同『内村鑑三の生涯 日本的キリスト教の創造』PHP研究所、文庫版一九九七年六月一六日、井上琢智『内村順也』『関西学院史紀要7』二〇〇一年三月など
- 26 内村鑑三 宮部金吾宛英文書簡(一八八一・一〇・一四付)『内村鑑三全集36 書簡一』一〇ページ
- 27 注14に同じ。五九ページ
- 受領日 二〇一八年四月二〇日
受理日 二〇一八年六月一三日